

# シノドスへの歩み みことばと共に 聖家族C年

小西広志

2021年12月26日

## はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2021年12月26日、聖家族の主日です。今日の朗読の箇所をシノドスの教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう。

## イエズス、マリア、ヨゼフ

みことばと共にということで、主日の朗読箇所からみことばを選んで説明をしてみました。今日は少し趣向を変えて、味わいたいのは「イエズス、マリア、ヨゼフ」という聖家族の御名についてです。

## カトリック聖歌集 292 番

滅多に歌われなくなった聖歌ですが、カトリック聖歌集の292番に「ああ イエズス」という曲があります。

ああイエズス マリア ヨゼフわれに  
耳かたむけまして かえりみませ  
(おりかえし)  
わが世のいのちの 夕暮(ゆうぐれ) せまり  
さびしき心にぞ み名を呼べる  
われと共にいまし なぐさめませ

ああイエズス マリア ヨゼフいまぞ  
みひかり照らしませ わがところに  
(おりかえし)  
わが世のいのちの 夕暮(ゆうぐれ) せまり  
さびしき心にぞ み名を呼べる  
われと共にいまし なぐさめませ

ああイエズス マリア ヨゼフ来たり  
みむねしめしたまえ まずしき身に

(おりかえし)

わが世のいのちの 夕暮 (ゆうぐれ) せまり

さびしき心にぞ み名を呼べる

われと共にいまし なぐさめませ

## 御名を呼ぶ

聖家族とはイエズス、マリア、ヨゼフを指します。そして、教会の長い伝統の中で「イエズス、マリア、ヨゼフ」と御名を呼んで、祈りました。祈りだけではありません。「イ・エ・ズ・ス・マ・リ・ア・ヨ・ゼ・フ」と十の音になります。ですから、日常の生活の中でこの名を呼びながら、数を数えあげたものです。

ああイエズス マリア ヨゼフわれに耳かたむけまして かえりみませ

と、この聖歌は歌い始めます。よく読んでみると、すごい信仰がここに表されています。イエズスさま、マリアさま、ヨゼフさま、どうぞあなたの方の名前を呼ぶわたしの願いと祈りに耳を傾けてください。そして、どうぞ無視することなく、わたしに振り返ってください。という意味です。そうです。これは聖家族に呼びかける祈りなのです

## いのちの夕暮れ

折り返しの部分は

わが世のいのちの 夕暮 (ゆうぐれ) せまりさびしき心にぞ み名を呼べるわれと共にいまし なぐさめませ

と歌います。「わが世のいのちの夕暮れ」とは人生のおわりを指すだけではありません。わたしたちのいのちの営み、家族のいのちの営みは時として夕暮れのような場面に遭遇します。一歩間違えると夜の暗闇に落ちていってしまいかねない、ギリギリの場面です。「さびしき心にぞ」はそんな人生の一場面の心情をよく表しています。カトリック聖歌集をすべて調べたわけではありませんが、「さびしき心」などという人の寂しさを表現するのはここだけかも知れません。人生の夕暮れの時、闇の中に吸いこまれそうなとき、寂しさの中で、イエズス、マリア、ヨゼフとお名前を呼びするのです。こうして、「われと共にしまし、なぐさめませ」とイエズス、マリア、ヨゼフと共に生きながら、生きる慰めと力をいただくようになるのです。これは、信仰の歌、祈りの歌です。イエズス、マリア、ヨゼフへと信頼をもって呼びかけた人の体験が歌われます。そして、この歌を歌う人々もイエズス、マリア、ヨゼフへの信仰を深めていきます。

## 聖家族

イエズス、マリア、ヨゼフの御名を唱える信仰態度は、いつの間にかついでてしまいました。この歌を知っている人もずいぶん減りました。菊地大司教様とか、わたしなどはイエズス、マリア、ヨゼフの御名を唱える信心で育った最後の世代かも知れません。

別に懐古趣味でこの歌を皆さんにお知らせしているのではないのです。聖家族とはイエズス、マリア、ヨゼフであって、わたしたちの祈りや気持ち、態度をベツレヘムの馬小屋に静かにたたずむ聖家族に向けてよいので

す。あるいは、ヘロデを避けるためにエジプトへと逃げたこの家族の姿と、困難の中にあっても一生懸命に生きていこうとするわたしたちの家族の姿を結び合わせてよいのです。コプト教会では、聖家族が逃れたと信じられている道沿いの修道院が建てられていると聞いたことがあります。聖家族とは研究の対象ではありません。聖家族とは理想の家族の姿でもありません。わたしたちが生きる家族の営みと一つのもののなのです。

## まとめ

今朝、朝の祈りの賛歌でこの歌、カトリック聖歌集 292 番を歌って、ハタと気がつきました。家族が抱えている悩みや苦しみ、悲しみはそれぞれです。しかも、現代は家族の姿が変わりつつありますから、新たな問題といえるでしょうか、チャレンジや課題を現代の家族は抱えてるでしょう。しかし、教会はイエズス、マリア、ヨゼフと聖家族の名を呼びながら、そこから生きる力と希望をくみ出してきたのです。

この半世紀、なんだか日本のカトリック教会は洗練されすぎてしまったように思います。単純に御名を呼びながら生きる信仰を失ってしまったようにも思います。それは信心だといって小馬鹿にしてきたようにも思えるのです。長い教会の歴史の中で、無名の人々がイエズス、マリア、ヨゼフの聖家族から恵みをいただいていたのではないのでしょうか。

ひと言つけ食わさせていただくと、カトリック聖歌集を編纂したのは北海道で宣教したフランシスコ会の司祭とブラザーたちでした。原曲はヨーロッパで歌い継がれてきた教会の賛歌です。それに日本の歌詞を重ねていきました。編纂作業の背景にあるのは、人々の生きた信仰です。そして、神学的に見ると御名の信心です。イエスの名を呼ぶ、マリアの名を呼ぶ、ヨセフの名を呼ぶことから生まれるやすらぎと優しさの体験です。こういった歌は残念ですが、典礼聖歌集にはない。「ああ イエズスよ」とわたしたちが教会で共に歌うことで、わたしたちはたくさんの方々の時代と場所を超えた信仰の体験の中に入れられていくのです。

シノドスの教会とは、教会の中に新風を吹かせて、制度を改革することを目指すだけではありません。信心と呼ばれる信仰の体験を継承し、新たな光を当てることでもあるのです。

それではまた来週。よいお年をお迎えください。